

英語学習における学習動機、学習方略、 英語学力の関係

高 梨 芳 郎

(1993年9月10日受理)

1. 問題

学習方略 (learning strategies) は、情報を獲得したり、記憶したり、検索したり、使用したりするために、学習者が採用する学習の仕方である。たとえば、新しく学習した単語や構文をおぼえるために、それらの単語や構文を使って英文を自分で作ってみたり、それらの単語や構文を暗記したりすることも学習方略の1つである。英語学習の方略についての研究は、最近、次第に多くの研究者によってなされてきている (Rubin 1975, Stern 1975, Reiss 1983, Stern 1983, Wenden and Rubin 1987, Oxford and Nyikos 1989, Oxford and Crookall 1989, Bacon and Finnemann 1990, Oxford 1990, O'Malley and Chamot 1990, Wenden 1991, Nyikos and Oxford 1993)。

初期の研究では、よい学習者がどのような方略を採用するかについて考察や観察や簡単な質問紙法による調査などによって示されてきた。たとえば、Rubin (1975) はよい言語学習者が採用する学習方略を観察して、次のように整理している。よい学習者は、(1) 好んで、正確な推理をする。(2) 伝達動機が強い。(3) 意思伝達のために誤りをするをいとわない。(4) 伝達内容だけでなく、言語形式にも注意する。(5) 言葉を使う練習をする。(6) 自分や他の人の発話をモニターする。(7) 意味に注意する。これらの学習方略を採用する際には、学習者は意思伝達のために言語を積極的に使用しつつ、学習していくことになる。意味と形式に注意することも大切で、発話の観察も欠かせない。

同様に、Stern (1975) は、観察と考察によって、効率的な言語学習者の学習の仕方を要約している。学習方略は学習上の問題に対する対処の仕方であるとされ、そこでは、外国語学習に対する計画性や積極性、学習への取り組み方の傾向や感情も含まれている。それらは、(1) 学習目標をたてて、自分の学習をそれに向けて計画すること、(2) 積極的に学習課題に取り組むこと、(3) 目標言語とそれを話す人々の感情を受け入れようとする、(4) 言語の形式面にも注意すること、(5) 言語を使う際に、誤りをするを恐れないこと、(6) 文脈による意味の相違に常に注意すること、(7) 喜んで練習すること、(8) 実際の場面で使うこと、(9) 自分の言語を観察、モニターしてモデルと比べること、(10) なるべく母国語を使わず、目標言語で考えること、である。

一方、大学生84人に対して質問紙調査をして外国語学習の成績上位群と下位群の学習方略の違いを調べた、Reiss (1983) の結果も興味深い。それによれば、成績のよい学習者は、単語をおぼえる場合、その単語で文をつくっておぼえるというように、学習の仕方が具体的ではっきりしている。さらに、文をつくったり、理解する時にも意味を大切にし、自分なりの情報処理の仕方をもっている。これに対して成績不振の学生は、ただおぼえるまで勉強するというように、学習の仕方がはっきりせず、学習方略についても意識していないし、自分の学習スタイルももっていない。その結果、学習成果も思わしくない。

これらの初期の学習方略の研究に対して、最近では、経験と考察による学習方略の同定、リスト作成から進んで、学習者への面接、学習者による学習過程の記述・報告、実験・調査などの多様な方法が採用されるようになってきている。Oxford and Crookall (1989) によれば、

最近の研究では、観察と考察による学習方略のリスト作りの他に、必要に応じて、面接法や発語思考 (think-aloud) 法、学習者によるメモ (note taking)、日記法 (diary method)、質問紙法が採用されている。

学習方略の型についても、より包括的に調べられ、より組織的に整理されている。たとえば、Oxford (1990) は、学習方略を次の6つの型に整理している。(1) memory strategies、(2) cognitive strategies、(3) compensation strategies、(4) metacognitive strategies、(5) affective strategies、(6) social strategiesである。これらの中で、memory strategiesは効果的な記憶の仕方、発音とイメージを関連づけて単語をおぼえることなどである。これに対して、cognitive strategiesは認知面での言語処理の活用・適用に関するもので、未知語の意味を推測するために単語を理解できる部分にわけて推測することなどの言語処理だけでなく、英語でのテレビ放送や映画をみるようにするとかの学習機会についても含まれる。一方、compensation strategiesは、言語使用におけるパラフレーズ、造語、身振り表現、言語理解における意味推測などのコミュニケーション方略である。metacognitive strategiesは、学習の計画や評価に関わるもので、学習計画をたてたり、自己の英語力の伸びについて考えることなどである。英語を話す時に気持ちをリラックスさせるとかの情緒面での方略は、affective strategiesであり、social strategiesは他の人達と一緒に学習することで、たとえば、必要な場合、母国語話者に教えてもらうことなども含まれる。O'Malley and Chamot (1990) は、これらの中で、metacognitive strategies、cognitive strategies、social strategiesを代表的な学習方略と考え、それらの方略で、学習者の採用する学習方略をそれぞれ53%、30%、17%説明できるとしている。

学習方略の採用の仕方は、学習者の心理的要因に関係する。中でも、学習者の学習動機は学習方略の採用頻度と関わるのが指摘されている (Oxford and Nyikos 1989, Oxford and Crookall 1989)。学習動機を学習に向けての積極性という文脈で考えれば、動機づけの高いものほど、積極的に学習し、学習方略の採用頻度も高く、採用される型もより多いと予測される。このことは、学習方略の指導においても学習者の学習動機を考慮する必要性があることを意味している。学習動機と学習方略の採用頻度や型に関係があるとすれば、どのような型の学習動機をもつ学習者がどのような型の学習方略を採用する傾向がみられるかについて検討する必要がある。

しかしながら、学習方略についての実証的な研究は日本ではまだあまりなされていないし、外国でなされた研究についても、学習動機と学習方略についてそれぞれの因子を調べて、両者の関係を明らかにした研究は数少ない。Bacon and Finnemann (1990)、Oxford and Nyikos (1989) では、学習動機と学習方略の採用頻度や採用される学習方略の型との間に関係がみられたとしているが、学習動機因子の研究が十分になされているとは言い難い。また、学習動機因子や学習方略因子と英語学力との関係を実際に調べた研究はみあたらない。このような点を考慮して、本研究では学習方略、動機について質問紙法による基礎的な調査研究を行い、それぞれの結果について因子分析を行い、両因子間の相関を検討し、さらに、両因子と英語学力との関係もみた。

2. 方法

2. 1. 調査項目の作成

付表に示した2種類の調査内容で合計49項目を作成した。英語学習の動機についての調査項目が20項目 (付表1 参照) で、英語学習の方略についての調査項目が29項目 (付表2 参照) であった。これらの項目を作成する際に、学習動機については Gardner and Lambert

(1972)、高梨(1991)などを参考にした。なお、学習動機の項目1から項目8までは、Gardner and Lambert(1972)の統合的動機づけと道具的動機づけの調査項目である、Orientation Indexを和訳したものをほぼそのまま用いた。一方、学習方略については、Rubin(1975)、Stern(1975)、Stern(1983)、Bacon and Finnemann(1990)、Oxford(1990)などを参考にして作成した。

2. 2. 調査の実施方法

福岡県内の大学生169名(国立大学学生133名:4クラス、私立大学学生36名:1クラス)に対して、1991年の6月、7月、9月に調査を実施した。すべての調査項目は、5点法で被験者に評定してもらった。調査の信頼性を高めるために、5点法での評定基準として、「自分にもっともよくあてはまる」(5点)から「自分にまったくあてはまらない」(1点)までの5つの選択肢を示した。

2. 3. 英語学力テストの選定と実施方法

英語学力テストは、*CELT Form A*(D.P.Harris and L.A.Palmer 1986, McGraw-Hill)を採用して、同じ被験者に、1991年の6月から7月にかけて実施した。

2. 4. 分析の方法

付表に示した2種類の調査項目の回答結果を別々に因子分析し、因子を抽出した後、推定されたそれぞれの因子得点間の相関と、因子得点と英語学力テスト得点との相関を検討した。また、それらの因子得点のクラス間の相違も分析した。

3. 結果

3. 1. 英語学力テストの結果と学習動機、方略についての調査結果

実施した英語学力テストの結果は、200点満点(構造、語彙、聴解の合計点)(粗点)で、平均値は90.36で、標準偏差は18.41であった。ここでの被験者集団には幾分難しいテストではあったが、難易度の点で不適切なものではなかった。

学習動機、学習方略の調査結果については、それらの項目ごとの平均値と標準偏差を付表1と付表2に示した。

3. 2. 学習動機についての因子分析結果

付表1に示した20項目の回答結果について主因子法による因子分析を行い、固有値1以上を基準として5因子を抽出した。バリマックス回転後の因子負荷量を表1に示した。

表1により、学習動機についての第1因子は、項目20、19、17、18、16、15の因子負荷量が特に高いことから、専門的な技能も含む、言語使用能力の修得願望を表す因子と考えられる。従って、第1因子を「応用技能修得願望」の因子と命名した。第2因子は、これに対して、項目11、13、12、14の因子負荷量が特に高いので、基礎的能力の修得願望を示す因子と解釈できるので、「基礎的技能修得願望」の因子とした。第3因子についてはGardnerとLambertの統合的動機を示す項目4、6、8、2について因子負荷量が特に大であるので、「統合的動機」因子とした。第4因子は、項目10、9、1の因子負荷量が特に高いので成績志向の学習動機を示すと考えられるので、「成績志向」の因子と命名した。第5因子は、GardnerとLambertの道具的動機に関する項目5、3についての因子負荷量が特に高いので、「道具的動機」の因子と解釈した。なお、それぞれの因子の寄与率(%)は、順に、19.09、16.59、13.21、9.53、7.20であり、これらの累積寄与率は、65.63であった。

表1 学習動機についての因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

項 目	因子負荷量				
	I	II	III	IV	V
	応用	基礎	統合	成績	道具
20. 英語で論文を書けるようになりたいので。	.78				
19. 英語の論文を読めるようになりたいので。	.78				
17. 英語で手紙を読めるようになりたいので。	.77				
18. 英語の手紙を書けるようになりたいので。	.73				
16. 英語の小説や新聞を読めるようになりたいので。	.64				
15. 英語のニュースなどを理解できるようになりたいので。	.60	.42			
11. 英語を読む基礎的な力をつけたいので。		.82			
13. 英語を聞く基礎的な力をつけたいので。		.81			
12. 英語を書く基礎的な力をつけたいので。		.79			
14. 英語を話す基礎的な力をつけたいので。		.75			
4. 人々とその生活様式についての理解を深められるから。			.76		
6. もっと多くの人々と話しあえるようになるから。			.73		
8. 人々の考え方や行動がわかるようになるから。			.68		
2. 人々と友人になれるから。			.61		
10. 単位をとるため。				.77	
9. 試験でよい成績をとるため。				.74	
1. 卒業（進学）のために必要であるから。				.73	
5. 将来就職に役に立つので。					.75
3. 英語を知っていれば、社会的に高く評価されるから。					.70
7. 英語が流暢に話せなければ、教育を受けた人とは言えないと思うから。					

注) 因子負荷量が.40以上のもののみを示した。なお、I～Vは第1因子から第5因子までを示す。項目7は、残余項目を示す。

3. 3. 学習方略についての因子分析結果

付表2に示した29項目の回答結果について、主因子法による因子分析を行って、固有値1以上を基準として3因子を抽出した。バリマックス回転後の因子負荷量は表2に示した。

表2から、学習方略についての第1因子は、項目12、24、26、11、27、15、4、13などの因子負荷量が特に高いので、言語使用による学習方略を示す因子であると解釈できるので、第1因子を「伝達学習方略」の因子と命名した。同様に、第2因子については、項目10、9、6などの因子負荷量が特に高いので、単語や文法などの言語知識を要素的に学習していく方略因子と解釈できることから、「言語要素習得方略」の因子とした。一方、第3因子は、文化についての項目1、2についての因子負荷量が特に高いので、「言語文化修得方略」の因子と名付けた。これらの因子の累積寄与率は49.38で、各因子の寄与率は順に31.82、11.99、5.57であった。

表2 学習方略についての因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

項 目	因子負荷量		
	I 伝達	II 要素	III 文化
12. 自分の考えていることを英語で言う。	.81		
24. 誤りを恐れず、英語を使う。	.81		
26. 喜んで練習する。	.74		
11. 英語が話されているのを聞く。	.74		
27. 実際の場面で使う。	.73		
15. 他の人に対して使ってみる。	.72		
4. 他の人達と英語を使う工夫をする。	.71		
13. テープを聞く。	.71		
22. 思考形式、感情を受入れる。	.68		
29. 日本語を使わず、英語で考える。	.68		
23. 英語の形式面にも注意する。	.67		
16. テープで聞いたことを繰返して言う。	.66		
28. 自分の英語を観察してモデルと比べる。	.64		
8. 自然な状況で使われた英語を理解する。	.64		
19. 概要をとらえる。	.63		
20. 自分の知識や経験を活用する。	.63		
18. 頭の中で文をつくってみる。	.60		
21. 目標をたて、学習をそれに向けて組織する。	.54		
25. 文脈による意味の相違に注意する。	.51		
5. 日本語と英語を比較する。	.46		
10. 単語を暗記して覚える。		.79	
9. 単語や熟語を繰返し書く。		.75	
6. 文法規則を記憶する。		.71	
14. 文法の説明を読む。		.63	
17. 辞書を近くにおいて常に参照する。		.50	
3. 一人で教科書の学習をする。		.46	
1. 日本文化との相違点を知る。			.82
2. 外国文化の特質を知る。			.72
7. 頭の中で日本語になおす。			

注) 因子負荷量が.40以上のもののみを示した。なお、I～IIIは第1因子から第3因子までを示す。

II、IIIについては、解釈しやすいように正負の符号を逆にしてある。なお、項目7は残余項目を示す。

3. 4. 伝達学習方略についての因子分析結果

伝達学習方略についての因子をより明確にするために、表2に示した、伝達学習方略因子に対して因子負荷が高い20項目の回答結果について、さらに、主因子法による因子分析を行った。その結果、固有値1以上を基準として4因子を抽出し、バリマックス回転後の因子負荷量を表3に示した。

表3 伝達学習方略についての因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

項 目	因子負荷量			
	I 思考	II 使用	III 共同	IV 音声
23. 英語の形式面にも注意する。	.65			
20. 自分の知識や経験を活用する。	.64			
21. 目標をたて、学習をそれに向けて組織する。	.59			
19. 概要をとらえる。	.56			
18. 頭の中で文をつくってみる。	.55			
25. 文脈による意味の相違に注意する。	.49			
22. 思考形式、感情を受入れる。	.45			
27. 実際の場面で使う。		.81		
26. 喜んで練習する。		.61		
24. 誤りを恐れず、英語を使う。	.46	.60		
28. 自分の英語を観察してモデルと比べる。	.51	.53		
29. 日本語を使わず、英語で考える。		.52		
4. 他の人達と英語を使う工夫をする。			.77	
12. 自分の考えていることを英語で言う。			.73	
15. 他の人に対して使ってみる。			.62	
11. 英語が話されているのを聞く。			.43	.42
13. テープを聞く。				.71
16. テープで聞いたことを繰返して言う。				.64
8. 自然な状況で使われた英語を理解する。				.42
5. 日本語と英語を比較する。				

注) 因子負荷量が.40以上のもののみを示した。なお、I～IVは第1因子から第4因子までを示す。II、IVについては、解釈しやすいように正負の符合を逆にしてある。なお、項目5は残余項目を示す。

表3から、伝達学習方略についての第1因子は、項目23、20、19などの因子負荷量が比較的高いので、分析・総合や経験の活用などによる言語処理に関わる方略因子であると解釈できるので、「言語思考学習方略」の因子とした。第2因子については、項目27、26、24などの言語使用による学習方略を示す項目の因子負荷量が高いことから、「言語使用学習方略」の因子とした。一方、第3因子に対しては、他の人との伝達練習を意図する項目4、12、15の因子負荷量が高いので、「共同学習方略」の因子と名付けた。第4因子については、項目13、16、8の因子負荷量が比較的高く、これらはテープなどの音声による学習方略に関わるので、この因子を「音声学習方略」因子とした。これらの4因子の累積寄与率は58.27で、各因子の寄与率は順に18.50、15.19、14.18、10.39であった。

3. 5. 学習動機、学習方略の各因子得点と学力テスト得点との相関

学習動機、学習方略、伝達学習方略についての推定されたそれぞれの因子得点と学力テスト得点との相関を調べ、その結果を表4に整理した。

表4 学習動機、学習方略、伝達学習方略の各因子得点と学力テスト成績との相関 (N=169)

	学 習 動 機					学 習 方 略			伝 達 学 習 方 略			
	I	II	III	IV	V	I	II	III	I	II	III	IV
	応用	基礎	統合	成績	道具	伝達	要素	文化	思考	使用	共同	音声
学力	.24**	-.02	.21**	-.16*	-.01	.32**	-.07	.22**	.23**	.18**	.26**	.03
構造	.16*	.03	.17*	-.08	.07	.24**	-.03	.17*	.20**	.07	.22**	.04
語彙	.28**	-.09	.14	-.15*	-.04	.24**	-.07	.25**	.18*	.20**	.16*	.01
聴解	.13	-.02	.24**	-.18*	-.13	.31**	-.11	.07	.15*	.21**	.25**	-.01
β 係数	.23	-.04	.18	-.14	-.01	.31	-.08	.20	.20	.15	.23	-.03
重相関			.30**(.09)				.37**(.13)				.33**(.11)	

注) I～Vはそれぞれ第1因子から第5因子までを示す。学習方略のII、IIIと伝達学習方略のII、IVについては、解釈しやすいように正負の符号を逆にしてある。**は $p < .01$ を、*は $p < .05$ を示す。

英語学力テストの合計得点と各因子得点との有意な相関は、学習動機については、「応用技能修得願望」(.24)、「統合的動機」(.21)、「成績志向」(－.16)においてみられた。同様に、学習方略においては、「伝達学習方略」(.32)、「言語文化修得方略」(.22)についてみられた。さらに、伝達学習方略については、「言語思考学習方略」(.23)、「言語使用学習方略」(.18)、「共同学習方略」(.26)について示された。

英語学力テストの合計得点を目的変数にして、各因子の因子得点を説明変数にした場合の自由度調整済み重相関係数は、表4に示したように、学習動機、学習方略、伝達方略の順に整理すると、.30、.37、.33でいずれも有意 ($p < .01$) であった。

3. 6. 学習動機と学習方略の因子得点間相関

学習動機について推定された各因子得点と学習方略、伝達学習方略について推定された各因子得点との相関を求めて、その結果を表5に示した。

表5 学習動機と学習方略の因子得点間相関 (N=169)

	学 習 方 略			伝 達 学 習 方 略			
	I	II	III	I	II	III	IV
学習動機因子	伝達	要素	文化	思考	使用	共同	音声
I (応用)	.37**	.22**	.19*	.34**	.17*	.14	.29**
II (基礎)	.23**	.12	.11	.22**	.07	.08	.22**
III (統合)	.50**	.03	.25**	.26**	.36**	.28**	.27**
IV (成績)	-.06	.30**	-.23**	.12	-.06	-.17*	.04
V (道具)	.15*	.33**	-.07	.30**	-.09	.13	.04

注) I～Vはそれぞれ第1因子から第5因子までを示す。学習方略のII、IIIと伝達学習方略のII、IVについては、解釈しやすいように正負の符号を逆にしてある。**は $p < .01$ を、*は $p < .05$ を示す。

学習動機別に結果を整理すると、「応用技能修得願望」は、「伝達学習方略」(.37)、「言語要素習得方略」(.22)、「言語文化修得方略」(.19)のすべての学習方略との間に有意な相関がみられた。同様に、伝達学習方略に属する「言語思考学習方略」(.34)、「言語使用学習方略」(.17)、「音声学習方略」(.29)との間にも有意な相関がみられた。これに対して、「基礎的技能修得願望」の動機因子は、有意な相関がみられたのは、学習方略については「伝達学習方略」(.23)のみであり、伝達学習方略に属する下位の方略についても「言語思考学習方略」(.22)、「音声学習方略」(.22)のみであった。

一方、「統合的動機」についての相関は、「言語要素習得方略」を除くすべての学習方略、および、伝達学習方略について有意であった。学習方略については、「伝達学習方略」(.50)と「言語文化修得方略」(.25)が有意であって、伝達学習方略に属する「言語思考学習方略」(.26)、「言語使用学習方略」(.36)、「共同学習方略」(.28)、「音声学習方略」(.27)のすべてが有意であった。逆に、「成績志向」因子は、学習方略については、「言語要素習得方略」(.30)のみが有意な正の相関であって、「言語文化修得方略」(－.23)とは有意ではあったが負の相関であった。同様に、伝達学習方略の下位の因子である「共同学習方略」(－.17)とも有意な負相関がみられた。

また、「道具的動機」については、学習方略に関する「伝達学習方略」(.15)、「言語文化修得方略」(.33)と有意な相関がみられ、伝達学習方略の「言語思考学習方略」(.30)との相関も有意であった。

3. 7. 英語学力テスト得点、各因子得点のクラス間比較

英語学力テスト得点、各因子の因子得点についてクラス（学校）間の平均値に相違がみられるかについて検討した。表6に、クラスごとの得点の平均値と標準偏差、分散分析結果（F）（F値のみ）とScheffeの方法による対比較の結果（有意差がみられた群間のみ）（F値は省略）を示した。

群間に有意差がみられたのは、英語学力テスト得点、「応用技能修得願望」、「統合的動機」、「成績志向」の各学習動機因子、「伝達学習方略」、「言語文化修得方略」の学習方略因子、「共同学習方略」の伝達学習方略因子であった。英語学力テスト得点については、Cクラス（学校）とEクラスとその他の3クラスとの間で有意差がみられた。学習動機因子については、「応用技能修得願望」がEクラスとその他の4クラス（学校）との間で差がみられ、「統合的動機」がCクラス、MクラスとSクラス間において差が示された。「成績志向」については、Pクラスとその他の4クラス（学校）間に差がみられた。学習方略因子については、「伝達学習方略」が特にCクラスとSクラス、CクラスとEクラスとで差がみられ、「言語文化修得方略」についてはPクラスとEクラスとの間のみで差があった。

表6 学力、因子得点のクラス（学校）間比較

	平均値と標準偏差					分散分析結果と対比較	
	C (n=36)	P (n=29)	M (n=38)	S (n=52)	E (n=14)	F値	群間の差
学 力	75.28 (11.46)	85.69 (13.35)	90.53 (13.35)	93.71 (14.50)	125.86 (13.70)	36.67**	C-P.M.S-E

学習動機							
I (応 用)	-.31 (.82)	-.11 (.77)	-.05 (1.01)	.02 (.83)	1.08 (.86)	6.60**	C.P.M.S-E
II (基 礎)	-.09 (1.11)	.14 (.85)	.02 (.96)	.06 (.84)	-.34 (.84)	.72	
III (統 合)	-.41 (.84)	.04 (.85)	-.25 (.73)	.37 (.89)	.25 (.90)	5.62**	C.M-S
IV (成 績)	-.07 (.67)	.74 (.59)	.00 (.91)	-.17 (.97)	-.75 (.53)	9.43**	C.M.S.E-P
V (道 具)	.31 (.79)	.09 (.90)	-.09 (.79)	-.18 (.83)	-.09 (.79)	2.00	

学習方略							
I (伝 達)	-.46 (.98)	.08 (1.01)	-.22 (.74)	.24 (1.00)	.70 (.44)	5.74**	C.M-E, C-S
II (要 素)	.06 (.93)	.17 (.78)	.07 (.53)	-.17 (.89)	-.07 (.53)	.80	
III (文 化)	-.02 (.87)	-.41 (.82)	.05 (.85)	.02 (.82)	.71 (.92)	4.06**	P-E

伝達学習方略							
I (思 考)	-.14 (.76)	.11 (.85)	-.12 (.94)	-.01 (.86)	.49 (.74)	1.68	
II (使 用)	-.24 (.94)	.05 (.94)	-.21 (.91)	.16 (.83)	.49 (.28)	2.80*	
III (共 同)	-.32 (.66)	-.11 (.94)	-.11 (.87)	.20 (.94)	.62 (.64)	4.07**	C-E
IV (音 声)	-.26 (.75)	.10 (.78)	.07 (1.05)	.11 (.72)	-.13 (.72)	1.38	

注) I～Vはそれぞれ第1因子から第5因子までを示す。また、C、P、M、S、Eは、クラスを示す。平均値は上段に、標準偏差は下段の()の中に示している。F値はF(4,164)の値を示し、**は $p < .01$ を、*は $p < .05$ を示す。なお、学習方略のII、IIIと伝達学習方略のII、IVについては、解釈しやすいように平均値の正負の符号を逆にしてある。群間の差は、-で示したクラス間で差がみられることを示す。例えば、C-P.M.S-EはCクラスとP、M、SクラスとEクラスの3つの群間差を示す。

4. 考察

4. 1. 学習動機因子

学習動機についての20項目の調査結果を因子分析した結果、互いに独立した、5つの因子が抽出された。このことは、学習動機について20の変数(項目)が、相互に関係のない、5つの因子でかなり説明できることを示唆している。

学習動機についての第1因子は、専門的な技能も含む、言語使用能力の修得願望を表すもので、「応用技能修得願望」の因子であった。第2因子は、これに対して、基礎的能力の修得願望を示す因子であり、「基礎的技能修得願望」の因子であった。また、第3因子については、GardnerとLambertの統合的動機を示す、「統合的動機」因子が抽出された。これに対して、第4因子は、成績向上の学習理由を示すもので、「成績志向」の因子であった。さらに、第5因子は、GardnerとLambertの道具的動機に関するもので、「道具的動機」の因子であった。

これらの因子を整理すれば、学習動機についての第1因子と第2因子は、技能修得に関する学習理由である。第3因子から第5因子までは統合的動機と道具的動機にかかわるもので、英語を使って何かをするという意味での言語使用に関する学習理由と考えられる。第4因子の「成績志向」因子は、成績のためという、非社会的な言語使用にかかわるものであるが、功利的価値に関連する学習理由という点で、一種の道具的動機とみなすことができる。

「統合的動機」と「道具的動機」の2因子が抽出されたが、このことは、少なくとも、これらの2つの型の動機がここでの被験者集団にもみられることを示している。また、GardnerとLambertの「統合的動機」と「道具的動機」の概念が日本の大学生の英語学習の動機の質について説明するのには有効な概念であることも推察できる。「統合的動機」については、英語を話す人々の文化社会への理解・同化を志向することがここでの大学生の学習理由の1つになっているからであろう。また、「道具的動機」については、社会的評価についての項目と将来の就職についての項目のみで因子負荷量が高かったのも、社会的な観点からの功利的価値をもたせた学習理由がここでの被験者集団の学習動機の1つとなっているからであろう。学習成績については別に「成績志向」因子がみられたが、このことはGardnerとLambertの「道具的動機」の一部が単位取得という具体的で現実的なもう1つの学習理由として存在するからであろう。この「成績志向」因子については、因子負荷量の高い項目の平均値が3.33から3.99までであり、他の学習動機因子についての項目よりも高いことから、「成績志向」の学習動機はここでの大学生の最も一般的な学習理由として考えられるものである。

しかしながら、学習動機因子として「応用技能修得願望」因子と「基礎的技能修得願望」因子が抽出されたことは、GardnerとLambertの「統合的動機」と「道具的動機」だけでは、日本の大学生の英語学習の動機の質は十分には説明できないことも示唆している。ここでは、技能の修得自体が学習動機になっていることも示しているからである。英語を使って何かをするという学習価値を志向するものではなく、技能修得自体が目標であることを意味している。このことは、「成績志向」の学習理由とともに、学校での外国語学習の特質を反映したものと考えられる。社会的な場面で実際に英語を使う機会が比較的少ない外国語としての英語学習では成績や技能修得自体が主要な学習動機になっていると推察できる。

4. 2. 学習方略因子

学習方略については3因子が抽出されたが、調査した29の学習方略が3因子で説明できることを意味している。抽出されたそれらの因子によって、ここでの被験者集団が採用している学習方略の型が3つに分類されることになる。それらの学習方略因子は、「伝達学習方略」、

「言語要素習得方略」、「言語文化修得方略」であった。これらの因子が抽出されたことは、ここでの大学生の英語学習の仕方は、それぞれ、広い意味でのコミュニケーションによる学習の型、単語や文法などの個々の要素を重視して学習する型、文化修得を意図する型に整理できよう。

「伝達学習方略」因子に対して因子負荷量の高い項目が多くみられたので、その構成要因をさらに調べるために、それらの20項目についてさらに因子分析をした。その結果、「伝達学習方略」を構成する下位因子として、分析・総合や経験の活用などによる言語処理に関わる「言語思考学習方略」の因子、言語使用による「言語使用学習方略」の因子、他の人との伝達練習を意図する「共同学習方略」の因子、テープなどの音声による学習方略についての「音声学習方略」因子がみられた。このことは、伝達学習方略には、単に、実際に英語を使うことによって学習していく方略だけでなく、言語形式に注意したり、知識や経験を活用したりする思考や認知面での方略、音声面での練習を含む方略、さらには、他の人とのコミュニケーションの共同学習の方略も含まれることを意味している。

4. 3. 学習動機因子、学習方略因子と英語学力との関係

どのような学習動機や学習方略が英語学力にかかわるのであろうか。いいかえれば、よい学習者は、どのような学習動機、学習方略を採用しているのであろうか。これについて検討するために、学習動機と学習方略のそれぞれの因子について推定された被験者の因子得点と英語学力テストの成績との相関を調べた。

その結果、学習動機については、「応用技能修得願望」、「統合的動機」、「成績志向」の各因子において、英語学力テストの合計得点との間に有意な関係がみられた。ただし、「成績志向」については負相関であった。これらのことは、実際に論文や手紙を書いたり、読んだりすることなどの技能を身につけたい学習者や、「統合的動機」をより強くもった学習者ほど成績が高く、逆に、単位をとるために学習するといった「成績志向」動機の強い学習者ほど成績が低い傾向がみられることを示している。これらの相関がみられた学習動機については、学習に対する積極性という共通要素がみられ、学習に向けての動機という意味でのいわゆる学習意欲 (motivation for learning) の強さにかかわるからであろう。

また、「道具的動機」との相関がみられなかったのは、外国語としての学習環境では社会的に英語を使うことがそれほど一般的でなく、社会的に承認される手段として十分機能していないからであろう。また、英語学力の下位テストについて特に目だった傾向をみれば、「語彙」は「応用技能修得願望」と、「聴解」は「統合的動機」と、それぞれ最も相関が高かったが、これは、応用技能の修得には多くの語彙を修得する必要があること、目標言語の文化・社会への理解や同化には特に聴解技能が必要であることを示唆しているようである。

学習方略因子については、「伝達学習方略」と「文化修得方略」において、英語学力テストの合計得点との間に有意な相関がみられた。このことは、言語使用と文化理解を重視する学習方略を採用する学習者ほど英語の学力が高い傾向がみられることを示している。

これらの学習方略因子を構成する個々の学習方略（たとえば、「よい学習者は誤りを恐れず、英語を使う」など。）は、従来、よい学習者の特質として、Rubin (1975)、Stern (1975、1983)、Reiss (1983) などによって、指摘されてきた方略である。このことは、それらの観察結果が日本の大学生の英語学習者にも妥当性をもつものであることを示唆している。逆に、「言語要素習得方略」は、英語学力との関係がみられなかったが、これは、語彙や文法規則をそのまま暗記したり、書いたりして学習する仕方では、一般的には、英語の学力には結びつかないことを示している。この種の学習方略は、Reiss (1983) などによって観察された下位の学習者の採用する学習方略に類似しているものである。

伝達学習方略について、さらに、下位の因子と英語学力テストの合計得点との相関を調べた結果、「音声学習方略」を除く、他の3つの方略因子で有意な相関がみられた。このことは、伝達学習方略の中でも、特に、「言語思考学習方略」、「言語使用学習方略」、「共同学習方略」が英語学力と関係することが示された。テープを聞いたりすることも大切であるが、それよりも、自分の知識や経験を活用して英語を理解したり、創造的に文をつくったり、他の人達とコミュニケーションをしたりすることの方が英語学力にかかわることを示唆している。自分の知識や経験に位置づけて、自分の言葉として、英語を伝達的手段として創造的使用することが英語力をつけることになろう。

また、英語学力の下位テストと学習方略因子および伝達学習方略因子との相関については、英語学力全体の場合とほぼ同様であった。ただし、「聴解」については、「文化修得方略」とは有意な相関がみられなかった。これは、「聴解」は「伝達学習方略」とのみ有意な相関がみられ、「文化修得方略」が「語彙」との相関が中でも高かったことから推測すると、「聴解」は言語の伝達面との関係がより深いのに対して、どちらかと言えば、「文化修得方略」は理解面との関係がみられるからであろう。また、「構造」については、伝達学習方略の下位の因子である「言語使用学習方略」との間に有意な相関がみられなかったが、これは実際に英語を使ったりする際には語彙力や聴解力は特に必要であるが、ここでの学習者には文法力はそれほど関係がないからであろう。

なお、英語学力テストの合計得点を目的変数にして、各因子の因子得点を説明変数にした場合の自由度調整済み重相関係数は、学習動機、学習方略、伝達方略の順に整理すると、.30、.37、.33でいずれも有意であったが、このことは、学習者によって報告された、学習動機、学習方略、伝達学習方略についての各因子で、それぞれ英語学力テストの得点分散を10%前後説明できることを示している。

4. 4. 学習動機と学習方略の因子得点間相関

学習動機と学習方略の採用の仕方との関係は一様ではない。学習動機の型と学習方略の型によってそれらの関係は異なるようである。

「応用技能修得願望」の因子については、学習方略、伝達学習方略のほぼすべての因子との間に有意な相関がみられた。このことは、専門的な技能も含む、言語使用能力の修得願望をもつ学習者は、ほぼ、すべての型の学習方略を採用する傾向があることを示唆している。これに対して、「基礎的技能修得願望」の因子については、「伝達学習方略」、「言語思考学習方略」、「音声学習方略」との間に有意な相関がみられたのみであった。このことから、基礎的能力の修得願望をもつ学習者は、比較的限られた学習方略の型をより強く採用する傾向があることがわかる。分析・総合や経験の活用などによる認知面での言語処理に関わる方略やテープでの学習方略をより多く採用するようである。反面、「言語使用学習方略」や「共同学習方略」などの伝達にかかわる方略はそれほど採用しない傾向がみられる。これらのことは、学習動機の質がより専門的になり、学習動機が強まるほど、採用される学習方略の型も多様になり、より伝達志向型になることを示唆している。

「統合的動機」因子については、「言語要素習得方略」を除くその他のすべての方略因子との有意な相関がみられた。特に、「伝達学習方略」因子との間にはかなりの相関がみられた。これに対して、「道具的動機」因子については、学習方略の中では、特に、「言語要素習得方略」因子との相関が比較的高く、伝達学習方略の中では「言語思考学習方略」との相関のみが有意であった。「統合的動機」と「道具的動機」は、ともに、英語を使って何かをするという意味での言語使用に関する学習理由であると考えられるが、「統合的動機」の方は、伝達や文化面での学習方略にかかわるのに対して、「道具的動機」は言語要素の学習方略や

認知面での学習方略にのみ関係すると推測できる。「統合的動機」が「言語要素学習方略」以外のすべての学習方略と有意な相関がみられる理由は、「統合的動機」の概念自体に、目標言語の文化・社会への理解だけでなく、同化の意図も含まれているためであろう。これに対して、「道具的動機」では、社会的評価を得るためとか、就職のために学習するという理由であり、学習の仕方も語彙や文法規則を暗記したり、さらに進んだとしても、概要把握などの分析や理解を主とした認知面での学習方法に限定されるのであろう。逆にみれば、社会的評価や就職が、一般的には、試験の成績で決められる傾向がみられるともいえよう。

「成績志向」因子については、学習方略については、「言語要素学習方略」と有意な相関がみられた。しかしながら、「言語文化修得方略」と「共同学習方略」とは有意な相関がみられたが、ともに負相関であった。これらのことは、「単位をとるため」などの「成績志向」の学習理由をもった学習者は、文化などを考慮せずに、語彙や文法規則を一人で暗記したりする言語要素の学習に努力する傾向がみられるようである。言葉を知識の集合と考えて、言語要素を機会的に学習していく、一種の知識習得の方法である。

4. 5. 英語学力テスト得点、各因子得点のクラス間比較

学習者はどのような学習動機をもって、どのような学習方略を採用するかについては、学習者の英語学力によって微妙な相違をみせていた。しかしながら、学習動機や学習方略の型は英語学力の相違によってだけでなく、クラス（学校）の違いによっても相違がみられる場合があるのではないだろうか。そこで、報告された学習動機、学習方略についての各因子の因子得点にクラス（学校）間の相違がみられるかを調べた。クラス（学校）間の相違と英語学力による相違を区別するために、まず、英語学力についてのクラス（学校）の相違の有無をみた。その結果、英語学力については、Cクラス（学校）とP、M、Sの各クラスとEクラスとの間に相違がみられた（P、M、Sの各クラス間には有意差はなかった）。

学習動機については、クラス（学校）間での有意差がみられたのは、「応用技能修得願望」、「統合的動機」、「成績志向」の各因子であった。

「応用技能修得願望」については、英語専攻のEクラスとその他のクラス（学校）間のみで有意差がみられた。このことは、この学習動機は、この調査では、英語専攻の学生により強くみられる動機であることを示している。しかしながら、英語専攻のEクラスの英語学力テスト得点の平均値が他のクラス（学校）と比較してかなり高かったこと、さらに、すべてのクラス（学校）間でこの因子得点のクラス別平均値が英語学力テスト得点の平均値とともに推移していたことも考慮すると、ここでのクラス（学校）間の有意差はクラスの専攻の相違によるものだけでは解釈できない。従って、「応用技能修得願望」は、この場合、英語学力の上位群でより多くみられるもので、英語専攻の学習者の学習動機を特徴づけるものと推測できる。

これに対して、「統合的動機」は、英語学力と有意な相関をみせながら、クラス間の微妙な相違を示した。特に、ここでの英語学力中位群であるSクラス（社会科専攻）と同じく中位群のMクラス（数学・理科専攻）との間に因子得点のクラス別平均値について有意差がみられた。Sクラスは特に「統合的動機」が強く、逆に、Mクラスは低かった。このことは、「統合的動機」の強さは、英語学力の高さに関係するものの、専攻によっても異なる可能性があることを示唆している。目標言語の文化・社会への理解・同化を志向する学習理由は、社会科専攻のクラスの方が理科・数学専攻のクラスよりも強いことが示された。この傾向が、どの程度一般化できるかどうかについては、さらに、調査クラスを増して検討することが必要であるが、文科系学生と理科系学生の学習動機の相違をより明瞭に示す例としては興味深い。

「成績志向」因子については、全体的には、英語学力と有意な負の相関がみられ、同一大学のP、M、S、Eの各クラス間で英語学力の高さに反比例して、「成績志向」の因子得点の平均値が低くなる傾向がみられた。しかしながら、英語学力で中位群に属する、体育科専攻のPクラスと数学・理科専攻のMクラスおよび社会科専攻のSクラスとの間にこの因子得点に有意差がみられたことは、一般的には、英語学力が低くなるにつれて「成績志向」動機が強まる傾向がみられるものの、その学習動機は特に体育専攻の学生に特徴的な動機であるといえるかもしれない。

学習方略全体に関しては、同様に、「伝達学習方略」、「言語文化修得方略」において、因子得点のクラス別平均値に全体で有意差がみられた。「伝達学習方略」に関しては、英語学力の中位群に属する、PクラスとMクラスの間で因子得点の平均値の高さの順位が逆になっていたものの、全体としては、ほぼ、英語学力の高さの順になっていた。クラス別平均値のクラス間の有意差も特に中位群のクラス間ではみられなかった。これらのことは、この「伝達学習方略」は、クラスの特質よりも英語学力の高さとともに採用頻度が高まっていくと推測できる。この「伝達学習方略」は英語学力の向上に関係があり、逆に、この方略を十分採用できるようになるためには、一定の英語力が必要になるとも考えられよう。

「言語文化修得方略」については、英語専攻のEクラスと体育科専攻のPクラスとの間のみに因子得点のクラス別平均値の有意差がみられた。その他のクラスでは、英語学力に関係なく、ほぼ因子得点のクラス別平均値は同じであった。これらのことは、「言語文化修得方略」の採用頻度の相違はこの両クラス間で明瞭にみられることを示している。英語専攻のEクラスでは、特に、この方略を採用する傾向があるが、体育科専攻のPクラスではあまり採用しない傾向にある。このことは、体育科専攻のPクラスで「成績志向」動機が強いこととも関連するようである。

伝達学習方略の下位因子については、特に、「共同学習方略」で、英語学力の下位群であるCクラス（学校）と上位群である、英語専攻のEクラスとの間に因子得点のクラス別平均値に有意差がみられた。この学習方略については、因子得点のクラス別平均値が英語学力テストのクラス別平均値とともに推移していき、英語学力テスト得点と有意な相関もみられたので、特に、クラス間の相違というよりも英語学力との間に相関関係がみられるものであるといえよう。

以上、学習動機、学習方略のそれぞれについて因子を抽出し、それらの相互関係と英語学力との関係について考察した。学習動機については、GardnerとLambertの「統合的動機」や「道具的動機」の因子の他に、「応用技能修得願望」、「基礎的技能修得願望」、「成績志向」の因子がみられた。また、学習方略全体については、「伝達学習方略」、「言語要素習得方略」、「言語文化修得方略」の因子が抽出された。さらに、「伝達学習方略」の構成要素として、「言語思考学習方略」、「言語使用学習方略」、「共同学習方略」、「音声学習方略」の因子がみられた。これらの学習動機因子と学習方略因子との関係についてみると、学習動機の型と強さによって、採用される学習動機の型と頻度が異なる傾向があることがわかった。「応用技能修得願望」、「統合的動機」の強い学習者ほど、「伝達学習方略」や「言語文化修得方略」を特に採用する傾向があり、「成績志向」、「道具的動機」の強い学習者ほど、特に、「言語要素習得方略」を採用する傾向があった。また、学習動機の型と強さ、学習方略の型と採用頻度によって、それらと英語学力との関係も異なる傾向があることがわかった。学習動機については、特に、「応用技能修得願望」、「統合的動機」が英語学力と正の相関がみられ、学習方略については、特に、「伝達学習方略」と「言語文化修得方略」が英語学力と相関があることがわかった。さらに、これらの学習動機の型と強さや学習方略の型と採用頻度は、英語

学力とは別に専攻の特質によっても異なる場合もあることが推測された。これらの学習動機と学習方略との関係、およびそれらと英語学力との関係については、今後、さらに学習方略の調査項目の質を高めて、被験者数を多くして調査研究する必要があるだろう。

文 献

- Bacon, S.M., and Finnemann, M.D. (1990) A study of the attitudes, motives, and strategies of university foreign language students and their disposition to authentic oral and written input. *MLJ*, 74, 459-473.
- Nyikos, M., and Oxford, R.L. (1993) A factor analytic study of language-learning strategy use: interpretations from information-processing theory and social psychology. *MLJ*, 77, 11-22.
- O'Malley, J.M., and Chamot, A.U. (1990) *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge University Press.
- Oxford, R.L. (1990) *Language Learning Strategies : What Every Teacher Should Know*. Newbury House.
- and Crookall, D. (1989) Research on language learning strategies : methods, findings, and instructional issues. *MLJ*, 73, 404-419.
- and Nyikos, M. (1989) Variables affecting choice of language learning strategies by university students. *MLJ*, 73, 291-300.
- Reiss, M-A. (1983) Helping the unsuccessful language learner. *Forum*, 21, 2-7.
- Rubin, J. (1975) What the 'good language learner' can teach us. *TESOL Q.*, 9, 41-51.
- Stern, H.H. (1975) What can we learn from the good language learner? *CMLR*, 31, 304-318.
- (1983) *Fundamental Concepts of Language Teaching*, Oxford University Press.
- 高梨芳郎 (1991) 「学習理由因子と他の型の動機づけ、学力との関係」『紀要』、第19号、九州英語教育学会、pp.50-58.
- Wenden, A. (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy*. Prentice Hall.
- and Rubin, J. (eds.) (1987) *Learner Strategies in Language Learning*. Prentice Hall.

付表1 英語学習の動機についての調査項目と調査結果（平均値、標準偏差）

項 目	平均値	標準偏差
1. 卒業（進学）のために必要であるから。	3.75	1.08
2. 英語を話す国の人々と友人になれるから。	2.64	1.04
3. 英語を知っていれば、社会的に高く評価されるから。	3.04	1.02
4. 英語を話す国の人々とその生活様式についての理解を深められるから。	2.55	1.03
5. 将来就職に役に立つので。	3.20	1.05
6. もっと多くの人々と話しあえるようになるから。	2.65	1.09
7. 英語が流暢に話せなければ、教育を受けた人とは言えないと思うから。	1.90	.80
8. 英語を話す国の人々の考え方や行動がわかるようになるから。	2.54	1.04
9. 試験でよい成績をとるため。	3.33	1.03
10. 単位をとるため。	3.99	1.00
11. 英語を読む基礎的な力をつけたいので。	3.34	.99
12. 英語を書く基礎的な力をつけたいので。	3.22	.99
13. 英語を聞く基礎的な力をつけたいので。	3.38	1.03
14. 英語を話す基礎的な力をつけたいので。	3.41	1.09
15. 英語のニュースや映画を理解できるようになりたいので。	3.06	1.17
16. 英語の小説や新聞を読めるようになりたいので。	2.69	1.10
17. 英語の手紙を読めるようになりたいので。	2.79	1.09
18. 英語で手紙を書けるようになりたいので。	2.76	1.09
19. 英語の論文を読めるようになりたいので。	2.27	.95
20. 英語で論文を書けるようになりたいので。	2.13	.95

注) 道具的動機：項目1、3、5、7 統合的動機：項目2、4、6、8

付表2 英語学習方略についての調査項目と調査結果(平均値、標準偏差)

項 目	平均値	標準偏差
1. 日本文化との相違点を知る。	2.54	.88
2. 外国文化の特質を知る。	2.87	.97
3. 一人で教科書の学習をする。	2.63	1.05
4. 他の人達と英語を使う工夫をする。	2.68	1.07
5. 日本語と英語を比較する。	2.39	.85
6. 文法規則を記憶する。	3.08	.96
7. 読んだり、聞いたりしたことを頭の中で日本語になおす。	3.06	1.00
8. 自然な状況で使われた英語を理解する。	3.54	.97
9. 単語や熟語を繰り返し書く。	3.15	.99
10. 単語を暗記して覚える。	2.96	.89
11. 授業や授業以外で英語が話されているのを聞く。	3.29	1.10
12. グループの他の人に自分の考えていることを英語で言う。	2.60	1.09
13. テープを聞く。	3.07	1.13
14. 文法の説明を読む。	2.78	.83
15. 学習した単語や構文を他の人に対して使ってみる。	2.69	1.05
16. テープで聞いたことを繰り返して言う。	2.97	1.10
17. 辞書を近くにおいて常に参照する。	3.55	.96
18. 英語を話す前に頭の中で文をつくってみる。	2.91	.99
19. 読んだり、聞いたりしたことの概要をとらえる。	3.58	.96
20. 読んだり、聞いたりする際に自分の知識や経験を活用する。	3.23	1.01
21. 学習目標をたてて、自分の学習をそれに向けて組織する。	2.84	1.03
22. 英語を話す人々の思考形式、感情を受入れる。	2.83	1.08
23. 英語の形式面にも注意する。	2.65	.87
24. 誤りを恐れず、英語を使う。	3.44	1.18
25. 文脈による意味の相違に常に注意する。	3.13	.87
26. 喜んで練習する。	3.25	1.18
27. 実際の場面で使う。	3.48	1.33
28. 自分の英語を観察してモデルと比べる。	2.47	1.13
29. なるべく日本語を使わず、英語で考える。	2.80	1.23